

茶路川筋の アイヌ語地名

第2回

○キナチャウシナイ

「キナチャウシナイ」は、白糠市街から真つすぐに北上する国道392号が、左にカーブする相互の大曲の東側にあります。

「キナ(ガマ・蒲)・チャ(刈る)・ウシ(いつもする)・イ(ところの)・ナイ(沢)」という意味で、ごぎを編むキナをいつも刈り取ったところからその名がつけました。

キナ(ガマ・蒲)は、池や沼、湿原などの水辺に生える多年草で、高さは1・5mから2mになり、雌花が熟すと褐色の穂になります。「シキナ」とも言いますが、釧路地方では「キナ」で、これで作ったごぎも「キナ」と呼びます。

■『ししゃも(柳葉魚)伝説』

昔、キナチャウシナイから流れる川のほとりに、柳の木が茂るス



キナチャウシナイから流れる川

スウシナイというところがあつて、柳夫妻が住んでいた。家は、柳で建て、屋根をキナでふいたそれは大きなものだった。

あるとき、ものがとれない悪い年があつて、コタンは餓死寸前となり、人々は柳夫妻のところに集まって神に祈った。柳夫妻が祈っ

ていると、にわかには大粒の雨が降ってきた。川辺の柳の葉は雨にたかべながら流れていった。

やがて雨が止み、あたりが静かになると、老夫婦の耳に「ピチャツ、ピチャツ」という音が聞こえてきた。水面を見ると、流れに逆らつて川をのぼる柳の葉の下に真つ黒に群がる小魚がいて、跳ねる姿が目に入った。老夫婦は思わず「スス(柳)・ハム(葉)・チェプ(魚)」と叫んだ。

この「スス・ハム・チェプ」が、コタンの人々を飢えから救つた。「貫塩喜蔵氏、礼木宅四郎氏の話 参考 『白糠のアイヌ語地名』 (白糠地名研究会)」

○オオナイ(大苗)

キナチャウシナイから国道を本別町方向へ進むと、しばらく直線が続き、やがて右に大きくカーブします。このあたりが「オオナイ」で、「オオ(深い)・ナイ(沢)」という意味です。漢字では「大苗」と書き、町内会の名前となつています。その名のとおり、カーブ手前の山側には深い沢があり、大苗川が茶路川へと流れています。

■文豪徳富蘆花の旅日記「茶路」

1910年(明治43年)9月24日、明治大正期の小説家徳富蘆花が、茶路に住むという知人に会うため白糠を訪れました。著作『みみずのたはこと』付録「旅の日記」の「茶路」には、白糠駅に降り立ち、案内の男とともに茶路へ向かい、途中ひと休みした家で、知人が釧路にいることを聞き、白糠へ引き返した道中が記されています。

その中に「二里も来たかと思ふ頃、路は殆んど直角に右へ折れて居る。最早茶路の入口だ。」とあり、地図で追うと、そこは大苗の右カーブと考えられます。

文豪徳富の旅日記には、オオナイまでの初秋の風景と人々との出会いが、文学の香り高く描かれています。



国道392号、大苗の右カーブ